

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02182

研究課題名(和文)ヘレニズム・ローマ期の地理的辺境におけるプラトン主義宇宙論の受容と再生産

研究課題名(英文)Acceptance and Transformation of Platonic cosmology in Hellenistic-Roman boundaries

研究代表者

金澤 修 (KANAZAWA, Osamu)

東京学芸大学・教育学部・研究員

研究者番号：60524296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：1)ギリシア哲学の中心地がアテナイやローマであった時代に、辺境地域であるバクトリア(現在のアフガニスタン)から出土したパピルス断片の読解を通して、以下のことが明らかにされた。A)その地にもプラトンの思想が伝えられていたことが、B)そしてその思想がアリストテレスの術語でまとめられていたことが、C)従ってギリシア思想とその解釈が伝えられていたことが明らかにされた。

(2) 仏教思想を広める目的でインド各地に建てられた「アショーカ王碑文」のうち、ギリシア語で刻まれた碑文の読解と語彙の分析を通して、碑文の翻訳者がアリストテレス倫理学やピュタゴラス思想を理解していたことが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西洋哲学の根源であるギリシア哲学、とりわけプラトン、アリストテレスの思想が、辺境地域であるバクトリアまで広がっていたことを明らかにしたこと。さらにそれらの術語がインド・仏教思想を表現する際にも使われていたこと、これらについてギリシア哲学、プラトン主義の最新の研究動向を反映させたこと。以上が本研究の学術的意義である。社会的意義としては本研究の成果が、一般向けの図書となり発表されたことである。

研究成果の概要(英文)：(1) Through the reading of the papyrus fragments excavated from the remote region of Bactria (present-day Afghanistan) at the time when the centers of Greek philosophy were Athens and Rome, the following points were revealed. A) The fact that Plato's thought was transmitted to that place, B) and that thought was summarized in Aristotle's terminology, C) Therefore, it was clear that Greek thought and its interpretation were transmitted.

(2) Among the "Ashoka inscriptions" built in various places in India for the purpose of spreading Buddhist thought, the following was revealed through the reading and analysis of the Greek inscriptions of "Ashoka inscriptions". The translator of the inscription understood Aristotle's ethics and Pythagoras thought.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：比較思想 プラトン アリストテレス 中期プラトン主義 アブレイウス 新プラトン主義 ミリンダ王の問い アショーカ王碑文

ヘレニズム・ローマ期の地理的辺境におけるプラトン主義宇宙論の受容と再生産

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始時点では、上記研究題目に認められるような、カルタゴ、シリア、バクトリア、インド、カルタゴなど、ヘレニズム世界における地理的辺境でのギリシア哲学の状況、とりわけプラトン主義的な宇宙論・世界観の展開と非ヘレニズム地域に対する思想的影響関係を、ギリシア哲学史的観点から研究は、わが国では皆無であった。この傾向は同時に世界的な研究の傾向でもある。言い換えれば、ギリシア哲学の伝統的な記述は、ギリシア・ローマという中心に焦点を合わせるのみで、その周辺地域での鮮明な姿を示していなかったと言えるだろう。

ギリシア哲学を通史的観点から研究するといったことは、近年、アルグラらによるケンブリッジヘレニズム哲学史(*The Cambridge History of Hellenistic Philosophy*, ed., by Algra et al., Cambridge University Press, Cambridge 1999,)、ガーソン編集のケンブリッジ古典後期哲学史(*The Cambridge History of Philosophy in Late Antiquity*, ed., by Gerson, L.P., Cambridge University Press, Cambridge, vol.1, 2, 2010)など華々しい成果があるが、しかしながら、上記で示したヘレニズム世界の地理的辺境、とりわけバクトリア、インドにおけるギリシア哲学の展開については、ほぼ皆無である。これに対し上記の地域については、むしろ東洋思想や東洋史方面からの研究による成果が一定程度存在していた。例えば久保田周「アショーカ碑文における dhamma の理解」『佛教大學大学院研究紀要 03 号』1973、「アショーカのギリシア語碑文」(『印度学佛教学研究』第 24 巻第一号所収 1975、塚本啓祥『初期仏教教団史の研究—部派の形成に関する文化史的考察(改訂増補)』山喜房佛書林 1970、『アショーカ王』平楽寺書店 1973、『アショーカ王碑文』第三文明社 1976、(加藤九祚『シルクロードの古代遺跡』岩波書店、2013、田中穂積「アイハヌム遺跡のギリシア語資料について」関西学院大学『人文研究』48 巻 4 号 1999, 41-53. などである。しかしながら、これらの研究は基本的に非ギリシア哲学を専門とはしない研究者によるものであり、ギリシア哲学の影響をギリシア哲学史として把握したものではない。このような現状に対し、本研究はヘレニズム・ローマ期の地理的辺境におけるプラトン主義宇宙論の受容と再生産というテーマでのギリシア哲学史研究を行なった。

2. 研究の目的

上記のような研究開始当時の状況に対し、本研究は、上記の地域におけるギリシア思想の展開を、具体的な文献学的裏付けを伴って行うことを目的とした。それは地理的辺境であるがゆえに哲学的問題として扱われてこなかった各種の資料を読解した上で総合し、ヘレニズム・ローマ期の地理的辺境が哲学・思想的・文化的辺境ではなく、当時のギリシア思想の中心地であるアテネ、ローマでの活動に対して引けを取らないものであったこと、さらには周辺の非ギリシア思想との異文化間思想交流が実現し、その点ではそれら中心地以上の活気があったことを示すことを目的としている。具体的には以下の点での研究である。カルタゴ、シリアについては、アプレイウスについて、彼の思想とプラトン解釈が、地理的・文化的辺境という制約を受けながらどのように展開したのかという点に集約される。これはアプレイウスがプラトン主義者であり、その限りでイデア論を含めたプラトン主義的世界観を受け継いでいること、同時に擬アリストテレス『宇宙について』のラテン語翻訳者として、アリストテレス的世界観をも理解していることが、カルタゴという地理的辺境と思想的になんらかの関連があるのか、という研究である。バクトリアについては、ギリシア人植民都市遺跡であるアイ・ハヌム出土の、いわゆる「哲学的パピルス断片」がギリシア哲学史としてどのように位置付けられるのか、そしてそこにどのような経緯でどのようなギリシア哲学がもたらされたのか、そしてそれはかかる植民都市の崩壊ののち、周辺地域に受け継がれていったのか、という研究である。さらにインドについては、ギリシア倫理思想と仏教思想との融合の具体的な事例であるギリシア語「アショーカ王碑文」やパーリ語『ミリンダ王の問い』など、非ギリシア、非ヘレニズム資料にギリシア哲学の影響が具体的にどこにどの程度認められるか、そしてそれはやはりどのような経緯でどのようなギリシア思想が影響したのか、それらを評価することである。

3. 研究の方法

本研究が扱う対象が哲学思想であるため、その出発点であるプラトン思想はもとより、プラトン以降の中期プラトン主義者、さらには新プラトン主義哲学については、テキストの読解を中心に進められた。プラトン思想については、現代の現象学との比較という観点も含め、その思想内容の相対化、また現代の政治思想研究者との「対話」も研究方法として取り入れることとなった。中期プラトン主義者、とりわけアプレイウスについては、作品読解が中心的な方法であり、著作や翻訳の読解が行われたが、さらに現代の研究者の評価も積極的に行なった。また本研究の出発点の一つであるプラトン主義宇宙論、とりわけ新プラトン主義哲学者プロティノスの宇宙論が、マクロコスモス・ミクロコスモの対応関係、さらには知性界と現象界との対応関係を元に研究された。また非プラトン主義宇宙観との関係などについても、主にテキストの読解を基にして行われた。ヘレニズム世界の辺境領域についての研究は、しかしながら、上記のようなギリシア語、ラテン語などのテキストの読解といった従来の方法のみでは行われなかった。ギリシア人植民都市遺跡アイ・ハヌムでのプラトン主義の影響を知るために、プラトンのイデア論が記載され

た「哲学的パピルス断片」を読解し、そこに認められる語彙が、中期プラトン主義におけるプラトン作品読解の伝統の中でどのように位置付けられるか、プラトン没後のアカデメイア派の思想的傾向、後代の中期プラトン主義との関係を考慮しつつ研究した。ギリシア語「アショーカ王碑文」におけるギリシア哲学の影響を研究する際には、『イラン碑文集成』*Corpus Inscriptiorum Iranicarum*, ed., International Committee, London, 2012 などのイラン出土の史学的資料群を活用した。また同時に、ギリシア思想とアラム語、マガダ語で表された思想との関係を考察するためには、「アショーカ王碑文」ではマガダ語版碑文を扱った *Les Inscriptions d'Asoka, traduites et commentées par Bloch, J., Les Belles Lettres, 1950* を活用し、さらにはアラム語碑文を参照した上で、ギリシア語、マガダ語、アラム語でそれぞれ語られた「アショーカ王碑文」について、翻訳者の知的背景や翻訳方針について研究した。『ミリンダ王の問い』については、かかる作品中で、ギリシア人王メナンドロス (=ミリンダ) にどのようなギリシア思想的背景が認められるのか、パーリ語文献の直接的読解をもとに研究した。

4. 研究成果

本研究における研究成果は以下の通りである。本研究の代表的な点に項目をつけて説明したい。

(1) プラトン哲学およびその世界観について

上記の研究領域に関して、研究分担者・宮崎文典によって、「公私の混合 / 二分法 / 調和 栗原裕次『プラトンの公と私』の公私論概観」(ペディアラヴィウム 巻:72 ページ:42-52) という論文が、第 37 回政治哲学研究会にて「近藤和貴氏の報告「プラトン『メネクセノス』と「忘却の政治」」へのコメント」という形式での討論が行われた。プラトン主義宇宙論の変容を考察する本研究にとって、その中心となるプラトン思想をこのような形で扱うことができたのは、本研究の成果の一つである。また研究分担者・宮崎文典は、『メルロ＝ポンティ哲学者事典 第一巻』に執筆している(「ソクラテス以前の哲学者たち」についての補記 / 「プラトン」についての補記)。プラトン思想を現代思想との比較から執筆されたかかる項目もまた、プラトン主義宇宙論を考察する際に重要な観点を提供するものであり、本研究の成果の一つである。

(2) 中期プラトン主義宇宙論について

上記の研究領域に関して、分担研究者・小島和男によって「アブレイウスにとっての哲学とは何か?」(研究年報 巻:64 ページ:1-17) という論文が一本、さらに「Richard Fletcher, Apuleius' Platonism: The Impersonation of Philosophy への書評」(日本西洋古典研究会編『西洋古典学研究』第 67 号, pp. 150-153) という書評がされている。アブレイウス研究の意義については既に「研究の目的」で記したが、中期プラトン主義者の中でも、アリストテレス論理学についてのラテン語翻訳書、擬アリストテレス『宇宙について』のラテン語翻訳、さらに小説『黄金の口バ』を記しつつ、同時にプラトン思想関連の書物を記すなど多彩であるが、それ故に、かつてより思想的評価が定まっておらず、それは現代の研究でも同様である。その限りで、分担研究者が、この掴み難い哲学者について、その哲学的思考を分析した上で、最新の研究書を書評することとなったのは、本研究の成果の一つである。

またアブレイウスがラテン語に翻訳した擬アリストテレス『宇宙について』についての研究書 Johan C. Thom 編集による *Cosmic Order and Divine Power: Pseudo-Aristotle, On the Cosmos* の書評(西洋古典学研究 巻:66 ページ:129-132) が、研究代表者・金澤修によって記された。

(3) 新プラトン主義宇宙論について

上記の研究領域に関して、研究代表者・金澤修によって、二本の雑誌論文が執筆された。「VI-1(42)-VI-3(44)「有るものの類について 1-3」 幾何学対象の成立に関わる箇所を中心にして」(新プラトン主義研究巻:16 ページ:39-50)、「仕掛けとしての比喩、イメージとしての光 プロティノスの魂論の理解のために」(東京都立大学哲学会編『哲学誌』巻:61 ページ:53-79) である。このうち前者については、プラトン主義宇宙論の「範型世界」である知性界における数と幾何学対象との関係について明確化したものである。後者については、プラトン主義宇宙論における「宇宙の魂」と「人間の魂」の関係を、生命体の位置付け、思考と脳との関係など、現代的観点を含めて研究したものである。またこの領域に関して研究代表者によって学会発表が一本行われた。「魂の座」と「身体を巡って」(東京都立哲学会 2018 年度大会) である。さらに非新プラトン主義的宇宙論について、研究代表者によって一冊の図書(共著)が刊行された。『原子論の可能性』(法政大学出版局, 2018, ページ:3-58) である。これら一連の研究によって、プラトン主義宇宙論の実質が研究された。

(4) 地理的辺境におけるプラトン主義思想、ギリシア思想の展開

上記の領域については、研究代表者・金澤修によって、二冊の図書(共著)が記された。その一冊『世界哲学史 1』(筑摩書房, 2020, ページ:265-292) では第 10 章においてギリシア思想とインド思想との影響関係について、とりわけプラトン没後のアカデメイア派に影響を与えたピュロン主義懐疑派の起源、「アショーカ王碑文」におけるギリシア思想の影響、『ミリンダ王の問い』におけるギリシア的倫理思想と仏教の無我論との関係を中心に、最新の研究動向を元に、またギリシア、インド双方の文献を原点に基づいて精査したものである。もう一つの共著『西洋古典学のアプローチ』(近刊、晃洋書房、ページ:307-336) では第 12 章において「アイ・ハヌム」都市遺跡におけるギリシア思想の影響について、出土した「哲学的パピルス断片」や「デルポイ金言断片」などの考古学的資料をもとに、主にプラトン・ピュタゴラス的宇宙論の影響を検討した。また上記の内容に関連しつつ、「アショーカ王碑文」とギリシア哲学との関係を検討する一本の

雑誌論文「アショーカ王カンダハル碑文におけるアクラシア概念」(比較思想学会編『比較思想研究』巻: 45 ページ: 91-99)、またこれに関連した学会発表は二本行われた。「アショーカ王カンダハル碑文におけるアクラシア概念」(比較思想学会第45回大会)と「アショーカ王碑文」のアラム語訳とアリストテレス倫理学の影響関係を論じた「エシックスを伝える言葉、エシックスを語る言葉」(ギリシア・アラビア・ラテン哲学研究会第一回大会)である。

以上の研究成果に付け加えておくべきものが二つある。

一つは海外の学会への参加である。研究代表者・金澤修と研究分担者・小島和男、宮崎文典は2019年7月15日よりフランス・パリで開催された国際プラトン学会に参加することができた。この際、アプレイウスはもとより、本研究に関わるヘレニズム世界の思想的動向について、最新の海外研究動向を、各国の研究者と共有できたことも本研究の成果である。

もう一つは、やはり研究代表者・金澤修と研究分担者・小島和男、宮崎文典が中心になり、ギリシア文学、フェニキア史、インド思想といった他領域の研究者を招いての研究会の開催である。残念ながら、以下の研究会は新型ウィルスによる疾病蔓延防止の観点から直前で中止されてしまったが、このような研究会が開催直前までに至ったのは本研究の成果の一つである。

「ヘレニズム・ローマ期の地理的辺境におけるプラトン主義宇宙論の受容と再生産」

2020年2月29日(土) 学習院大学 西1号館 101教室

金澤修(東京学芸大学)「最果てのヘレネス アショーカ王碑文におけるギリシアとアラム」

加藤 隆宏(東京大学)「インドの一元論と多元論 インドとギリシャの思想交流を再検討する」

佐藤 育子「ギリシア語・ラテン語文献史料にみられるフェニキア人像」

本間 俊行(北海道大学)「オスティアの「アプレイウスの家」をめぐる諸問題」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 金澤修 | 4. 巻 61 |
| 2. 論文標題 仕掛けとしての比喻、イメージとしての光 プロティノスの魂論の理解のために | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 東京都立大学哲学会編『哲学誌』 | 6. 最初と最後の頁 53-79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 金澤修 | 4. 巻 45 |
| 2. 論文標題 アショーカ王カンダハル碑文におけるアクラシア概念 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 比較思想学会編『比較思想研究』 | 6. 最初と最後の頁 91-99 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 小島和男 | 4. 巻 67 |
| 2. 論文標題 Richard Fletcher, Apuleius' Platonism: The Impersonation of Philosophyへの書評 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 西洋古典学研究 | 6. 最初と最後の頁 150-153 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 宮崎文典 | 4. 巻 72 |
| 2. 論文標題 公私の混合／二分法／調和 栗原裕次『プラトンの公と私』の公私論概観 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 ペディラヴィウム | 6. 最初と最後の頁 42-52 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 金澤修 | 4. 巻 16 |
| 2. 論文標題 VI-1(42)-VI-3(44)「有るものの類について1-3」 幾何学対象の成立に関わる箇所を中心にして | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 新プラトン主義研究 | 6. 最初と最後の頁 39-50 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 金澤修 | 4. 巻 66 |
| 2. 論文標題 Johan C. Thom 編集によるCosmic Order and Divine Power: Pseudo-Aristotle, On the Cosmosの書評 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 西洋古典学研究 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 小島和男 | 4. 巻 64 |
| 2. 論文標題 アプレイウスにとっての哲学とは何か? | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 研究年報 | 6. 最初と最後の頁 1-17 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 金澤修 |
| 2. 発表標題 アショーカ王カンダハル碑文におけるアクラシア概念 |
| 3. 学会等名 比較思想学会第45回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 金澤修 |
| 2. 発表標題 「魂の座」と「身体」を巡って |
| 3. 学会等名 東京都立哲学会2018年度大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 金澤修 |
| 2. 発表標題 エシックスを伝える言葉、エシックスを語る言葉 |
| 3. 学会等名 ギリシア・アラビア・ラテン哲学研究会第一回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 田上孝一・本郷朝香編、金澤修、坂本邦暢、青木滋之、池田真治、木島泰三、小谷英生、田上孝一、本郷朝香、武井徹也、白井雅人、東克明著 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 法政大学出版局 | 5. 総ページ数 352 |
| 3. 書名 原子論の可能性 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 モーリス・メルロ＝ポンティ、加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均、加國尚志、宮崎文典 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 白水社 | 5. 総ページ数 436 |
| 3. 書名 メルロ＝ポンティ 哲学者事典 第一巻 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 納富信留、柴田大輔、高井啓介、中島隆博、赤松明彦、松浦和也、栗原裕次、稲村一隆、荻原 理、金澤修 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 筑摩書房 | 5. 総ページ数 314 |
| 3. 書名 世界哲学史 1 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 日向太郎、逸見喜一郎、古澤香乃、河島四郎、上野由貴、小池登、大芝芳弘、佐野好則、栗原裕次、金子善彦、金澤修、宮原優、吉田俊太郎 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 晃洋書房（近刊） | 5. 総ページ数 未定 |
| 3. 書名 西洋古典学のアプローチ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 宮崎 文典 (MIYAZAKI Fuminori) (50506144) | 埼玉大学・教育学部・准教授 (12401) | |
| 研究分担者 | 小島 和男 (KOJIMA Kazuo) (80383545) | 学習院大学・文学部・教授 (32606) | |